

タカナの多収生産技術の開発

農業試験場



めはりずし

和歌山県で郷土料理「めはりずし」の材料に用いられるタカナは、主に水稲の裏作として東牟婁地域で栽培されてきた(約5ha)。近年は、西牟婁地域でも栽培が始まったが、栽培方法が確立されていないため収量が少ない。そこで、栽培方法の改善による安定した収量確保を目指し、施肥量、マルチ栽培、緩効性肥料の検討を行った。

タカナに適した施肥量の検討



①慣行(N30)



②肥料1.5倍(N45)



③肥料2倍(N60)

施肥量を多くすると増収する！

密植栽培における施肥量がタカナの収量に及ぼす影響

試験区	株重 (g)	収量 (t/10a)	*施肥窒素利用率(%)
①慣行	2,208 b	8.1 b	76.2 a
②肥料1.5倍	2,582 a	9.5 a	75.2 a
③肥料2.0倍	2,657 a	9.7 a	42.5 b

*施肥窒素利用率=各試験区の乾物重×窒素含有率÷窒素施肥量
注) Tukey法において5%水準で異符号間に有意差有り
栽植密度は3,666株/10a、平成26年9月29日定植、12月15日収量調査

肥料1.5倍と2.0倍で有意な差はなく、肥料2.0倍で窒素利用効率が悪くなる！

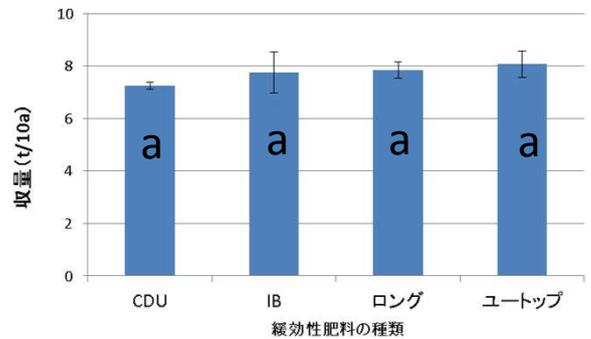
マルチ栽培の結果



平成26年度 マルチ現地栽培試験
(田辺市本宮町)

雑草への養分逸脱を防ぎ、タカナに養分がいきとどくことで株が大きくなる！

緩効性肥料の検討



異なる緩効性肥料による基肥全層施肥がタカナの生育に及ぼす影響

窒素施肥量は45kg/10a、栽植密度3,666株/10a、マルチ有
平成27年9月28日定植、12月9日収量調査

緩効性肥料の違いは、タカナの生育に影響がなかった。

タカナの栽培には、

- ・施肥量は窒素量45kg/10a(慣行の1.5倍)
- ・マルチの敷設
- ・緩効性肥料による基肥全層施肥